

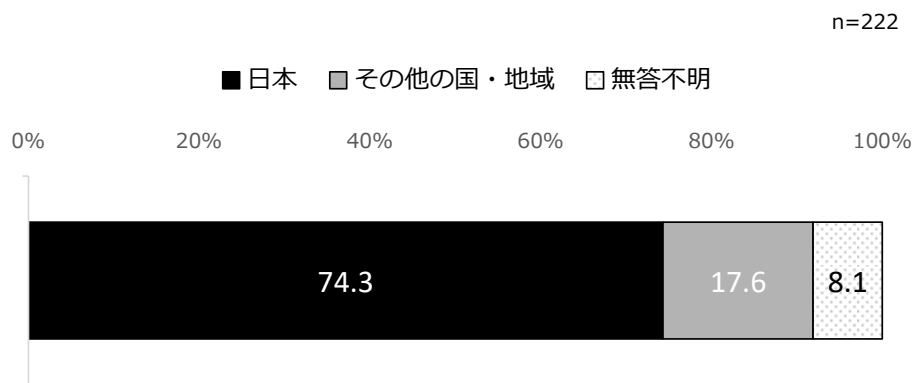
1. 分析上の「移民」の背景・定義

本章では外国につながる(外国にルーツのある)家庭について、調査結果から背景を確認し、2～5章の分析における「移民」の定義を行う。なお、これらの項目は回答者への配慮から「差し支えなければお答えください」と依頼しており、無回答率が高い点には留意が必要である。

1.1 子どもの出生国・日本在住歴

子どもの出生国についてたずねたところ、「日本」が7割強、「その他の国・地域」が2割弱となった(図表 1-1)。「その他の国・地域」を選んだ人に具体的な国名・地域名を記入してもらったところ、最多は「中国」で、「ネパール」「フィリピン」などが続いた。さらに子どもの日本在住歴も記入してもらったところ、1年(1年未満も含む)～12年に分布し、平均値は4.5年、最多は「1年(未満も含む)」であった。

図表 1-1 子どもの出生国・日本在住歴

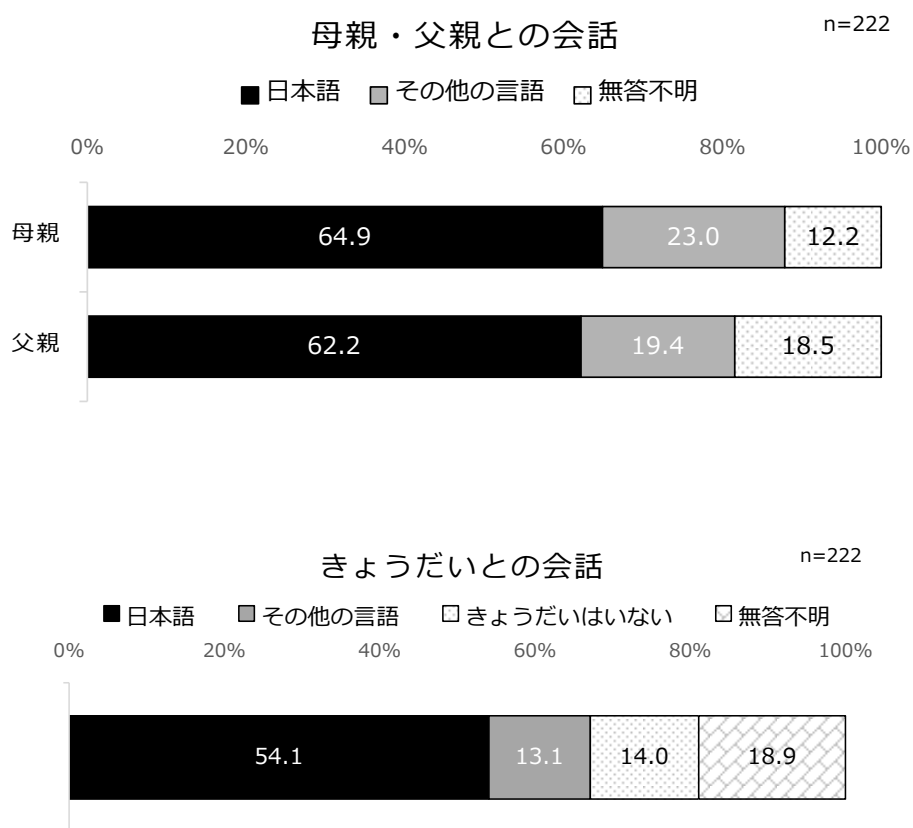


1.2 子どもが家庭で話す言語

調査対象の子どもが、家庭で母親(または母親に代わる方)・父親(または父親に代わる方)・きょうだいと、それぞれ主にどの言語で話すかを保護者にたずねた(図表 1-2)。日本語かその他の言語かで選択してもらったところ、母親との会話では 23.0%、父親との会話では 19.4%が「その他の言語」で主に話していた。具体的な言語を記入してもらくと、母親・父親ともに中国語が最多で、ネパール語・英語などが続いた。きょうだいと「その他の言語」で主に話すのは 13.1%であった。

なお、母親との会話・父親との会話の両方において主に「その他の言語」で話すのは 17.6%、いずれかの親と「その他の言語」で話すのは 24.8%であった(図表割愛)。

図表 1-2 子どもが家庭で話す言語

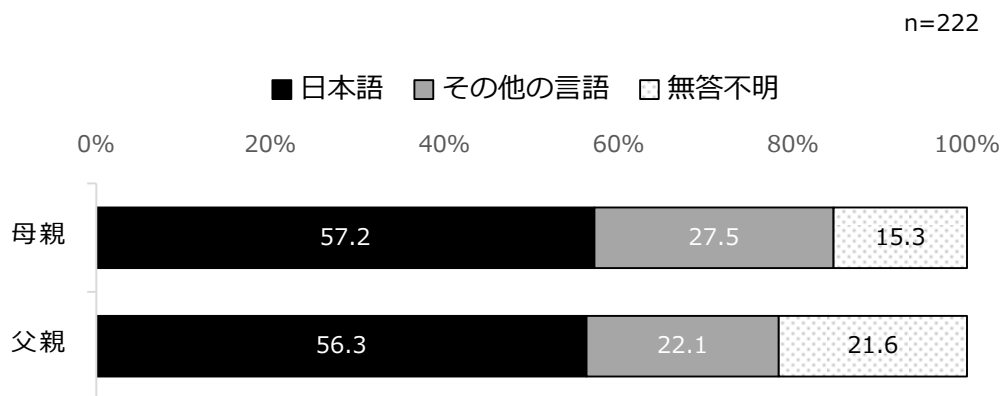


1.3 保護者の第一言語・日本在住歴

保護者の第一言語(最初に習得した言語)をたずねたところ、「その他の言語」を第一言語とするのは、母親の 27.5%、父親の 22.1%であった(図表 1-3)。「その他の言語」を選んだ人に具体的な言語を記入してもらったところ、母親・父親ともに中国語が最も多かった。母親では英語・ネパール語・タガログ語などが続き、父親ではネパール語・英語などが続いた。いずれも複数の言語を記入するケースがみられた。なお、両親ともに第一言語が「その他の言語」である割合は 19.8%、いずれかの親の第一言語が「その他の言語」である割合は 29.7%であった(図表割愛)。

第一言語で「その他の言語」を選んだ人には、日本在住歴を年単位で記入してもらった。在住歴は1年(1年未満を含む)～45年に分布し、平均値は15年であった。母親・父親ともに最多は「20年」で、回答の2割程度を占めた。母親では「10年」が続き、「1年」と「7年」が同数で並んだ。父親では「8年」「10年」「15年」が多かった。

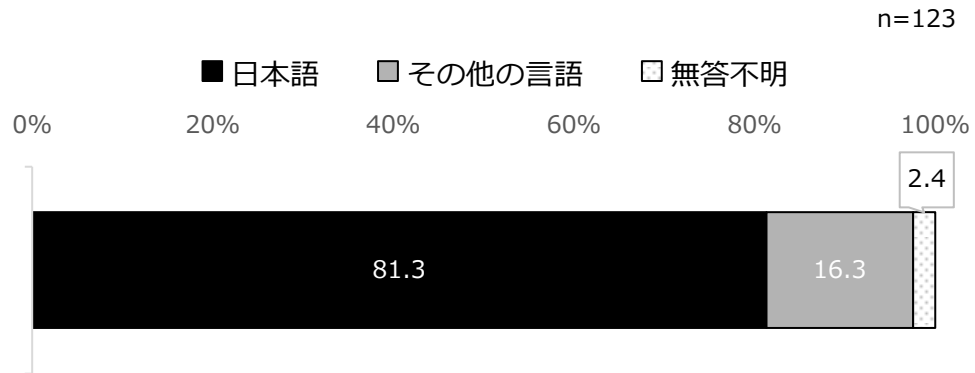
図表 1-3 保護者の第一言語



1.4 児童の言語アイデンティティ

4～6年生の児童に対しては、自分の気持ちや考えを最も伝えやすい言語をたずねた(図表 1-4)。「日本語」と「その他の言語」から選択してもらったところ、約 8 割が日本語、16.3%が「その他の言語」であった。具体的な言語では中国語が最も多く、ネパール語・英語と続き、複数の言語を記入する児童もみられた。

図表 1-4 児童の言語アイデンティティ



1.5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義

本調査においては「子どもの出生国」「子どもが家庭で話す言語」「保護者の第一言語」の3項目を、児童や家庭の背景(外国とのつながり)を識別する変数として用いることができる。本報告の分析では、いずれかの保護者(ひとり親の場合も含む)の第一言語が「その他の言語(日本語以外)」であるケースを「移民」、すべての保護者(ひとり親の場合も含む)の第一言語が「日本語」の場合を「日本人」として区分する。調査概要にも記したとおり、ここでの「移民」「日本人」はあくまで本調査における分析上の定義にすぎず、日本全体の「移民」に適用できる知見ではない点に注意が必要である。なお、第一言語をたずねる質問に無回答であったケースは除外して分析したため、「移民」の保護者は66名、「日本人」の保護者は125名となる。児童に関しては、分析対象とする学年や使用するデータ(質問紙・体力テスト)によって人数が異なるため、各図表に記載されたサンプル数を参照されたい。

回答を分析すると、子どもが外国生まれの児童・保護者、子どもがいずれかの親と他言語で会話する児童・保護者はすべて「移民」に含まれていた(図表 1-5)。主要調査項目については「子どもの出生国」「子どもが家庭で話す言語」を用いた区分でも分析したが、大きな違いはみられなかった。

図表 1-5 本報告で用いる「移民」「日本人」の定義

